動物園

芥川龍之介

象

象よ。キップリングは昔お前の先祖が、鰐に鼻を啣へられたものだから、未だにお前まで長い鼻をぶら下げて歩いてゐると云つた。が、おれにはどうしても、あいつの云ふ事が信用出来ない。お前の先祖は仏陀御在世の時分、きつとガンヂス河の燈心草の中で、昼寝か何かしてゐたのだ。すると河の泥に隠れてゐた、途方もなく大きな蛭が、その頃はまだ短かつた、お前の先祖の鼻の先へ、吸ひついてしまつたのに違ひない。さもなければお前の鼻が、これ程大きな蛭のやうに、

伸びたり縮(ちぢ)んだりはしないだらう。象よ。お前は印度(インド)の名門の生れだ。どうかおれの云つた通り、あのキツプリングの説などは口から出放題(ではうだい)の大法螺(おほぼら)だと、先祖の寃(ゑん)を雪(すす)ぐ為に、一度でも好(い)いからその鼻をあげて、喇叭(らつぱ)のやうな声を轟かせてくれ。

鸛(こふ)の鳥(とり)

あの頸(くび)をさ、襟飾(ネクタイ)のやうに結(むす)んでしまつたら、一体あいつはどうしてほどく気なんだらう。

駱駝（らくだ）

お爺（ぢい）さん。もう万年青（おもと）の御手入（おていれ）はおすみですか。ではまあ一服おやりなさい。おや、あの菖蒲革（しやうぶがは）の莨（たばこ）入は、どこへ忘れて御出でなすつた？

虎

虎よ。お前はコスモポリタンだ。豊干禅師（ぶかんぜんじ）を乗せたお前。和唐内（わたうない）に搏（う）たれたお前。それからウイルヤム・ブレエクの有名な詩に歌はれたお前。虎よ。お前は最

大のコスモポリタンだ。

家鴨（あひる）

子供が黒板（こくばん）へ白墨（はくぼく）で悪戯（いたづら）に書いた算用数字。　2、2、2、2、2、2。

白孔雀（しろくじやく）

これは年とつた貴婦人だ。お眼が少し赤く爛（ただ）れていらつしやる。鼈甲（べつかふ）の柄（え）のついた眼鏡（めがね）を持つて、一々見

物人を御覧になれば好（い）い。

大蝙蝠（おほかうもり）

お前の翼は仁木弾正（につきだんじやう）の鬢（びん）だ。面明（つらあか）りの蠟燭位（らふそくくらゐ）は、一煽（ひかあふ）りにも消し兼ねない。さうしたら、鼻の尖つた、眼張りの強い、脣（くちびる）をへの字に曲げてゐる顔が、うす暗い雲母摺（きららずり）を後（うしろ）にして、愈（いよいよ）気味悪く浮き上るだらう。落款（らくくわん）は東洲斎写楽（とうしうさいしやらく）……

カンガルウ

腹の袋の中には子供が一匹はひつてゐる。あれを出してしまつても、まだ英吉利（イギリス）の国旗か何かが、手品（てじな）のやうに出て来はしないか。

鸚哥（いんこ）

お前は古い唐画（たうぐわ）の桃の枝に、ぢつと止つてゐるが好（い）い。うつかり羽搏（はばた）きでもしようものなら、体の絵の具が剥（は）げてしまふから。

猿

猿よ。お前は一体泣いてゐるのか、それとも亦(また)笑つてゐるのか。お前の顔は悲劇の面(めん)のやうで、同時に又喜劇の面のやうだ。おれの記憶は縁日(えんにち)の猿芝居へおれを連れて行(ゆ)く。桜の釣板(つりいた)、張子(はりこ)の鐘、それからアセチレン瓦斯(ガス)の神経質な光。お前は金紙(きんがみ)の烏帽子(ゑぼし)をかぶつて、緋鹿子(ひがのこ)の振袖をひきずりながら、恐るべく皮肉な白拍子(しらびやうし)花子の役を勤めてゐる。おれの胸に始めて疑団(ぎだん)が萌(きざ)したのは、正にその白拍子たるお前の顔へ、偶然の一瞥(いちべつ)を投げた時だ。お前は一体泣いてゐるのか、そ

れとも亦笑つてゐるのか。猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。おれはお前程巧妙なトラジック・コメデイアンを見た事はない。――おれが心の中でかう呟(つぶや)くと、猿は突然身を躍(をど)らせて、おれの前の金網(かなあみ)にぶら下りながら、癇高(かんだか)い声で問ひ返した。「ではお前は？　え、お前のそのしかめ面(つら)は？」

山椒魚(さんせううを)

おれがね、お前は一体何物だと、頭に向つて尋ねたら、私(わたし)は山椒魚(さんせううを)ですよと、尻尾(しつぽ)がおれに返事をしたぜ。

鶴

県下第一の旅館の玄関、芍薬（しゃくやく）と松とを生（い）けた花瓶、伊藤博文（いとうひろぶみ）の大字（だいじ）の額（がく）、それからお前たちつがひの剥製（はくせい）……

狐

ふて寝だな。この襟巻め。

鴛鴦

胡粉の雪の積つた柳、銀泥の黒く焼けた水、その上に浮んでゐる極彩色のお前たち夫婦、——お前たちの画工は伊藤若冲だ。

鹿

この見事な刀掛には、葵の御紋散らしの大小でも恭しく掛けて置くが好い。

波斯猫（ペルシヤねこ）

日の光、茉莉花（まつりくわ）の匂（にほひ）、黄色い絹のキモノ、Fleurs du Mal, それからお前の手ざはり。……

鸚鵡（あうむ）

鹿鳴館（ろくめいくわん）には今日（けふ）も舞踏がある。提灯（ちやうちん）の光、白菊（しらぎく）の花、お前はロテイと一しよに踊つた、美しい「みやうごにち」令嬢だ。

日本犬

造り物の柳に灯(ひ)入りの月が出る。お前は唯遠くで啼いてゐれば好(い)い。

南京鼠(ナンキンねづみ)

上着(うはぎ)は白天鵞絨(しろびろうど)、眼は柘榴石(ざくろいし)、それから手袋は桃色繻子(じゆす)。——お前たちは皆可愛(かはい)らしい、支那美人にそつくりだ。後宮(こうきゆう) の佳麗(かれい)三千人と云ふと、おれは何時(いつ)も

お前たちが、重なり合つた楼閣の中に、巣を食つた所を想像する。そら、西施（せいし）が芋（いも）の皮を噛（か）じつてゐると、楊貴妃（やうきひ）は一生懸命に車をまはしてゐるぢやないか。

猩々（しやうじやう）

あの猩々（しやうじやう）の鼻の上には、金縁（きんぶち）の Pince-nez がかかつてゐる。あれが君に見えるかい？　もし見えなければ、今日（けふ）限り、詩を作る事はやめにし給へ。

鷺（さぎ）

祥瑞（しょんずゐ）の江村（かうそん）は暮れかかつた。藍色（あゐいろ）の柳、藍色の橋、藍色の茅屋（ばうをく）、藍色の水、藍色の漁人（ぎよじん）、藍色の芦荻（ろてき）。——すべてが稍（やや）黒ずんだ藍色の底に沈んだ時、忽ち白々（しらしら）と舞ひ上（あが）るお前たち三羽の翼の色。——皿の外までも飛び出さなければ好（い）いが。

河馬（かば）

挙（こ）す。梁（りよう）の武帝（ぶてい）、達磨大師（だるまだいし）に問ふ。如何（いかん）か是仏法（これぶつぽう）。

磨（ま）云ふ。水中の河馬（かば）。

ペングイン

お前は落魄（らくはく）した給仕人だ。悲しさうなお前の眼の中には、以前勤めてゐたホテルの大食堂が、今もAurora australisのやうに、輝かしい過去の幻を浮き上らせる事がありはしないか？

馬

凩（こがらし）の吹く町の角（かど）には、青銅（からかね）のお前に跨（また）がつた、やは

り青銅(からかね)の宮殿下が、寒むさうな往来(わうらい)の老若男女(らうにやくなんによ)を、揚々と見下(おろ)して御出(おい)でになる。さうしてその宮殿下の、軍服を召した御胸(おむね)には、恐れながら白い鴉(からす)の糞(ふん)が、……

梟(ふくろふ)

Brocken 山(ざん)へ！ 箒(はうき)に跨(また)がつた婆(ばあ)さんが、赤い月のかかつた空へ、煙突から一文字(いちもんじ)に舞ひ上(あが)る。と、その後(うしろ)から一羽の梟(ふくろふ)が――いや、これは婆さんの飼ひ猫が何時(いつ)の間(ま)にか翼を生やしたのかも知れない。

金魚

うす日の光がさして来ると、藻に立つた秋も目立つやうになつた。おれは、——所々鱗（うろこ）の剥（は）げた金魚は、やがてはこの冷たい水の上に、屍（むくろ）を曝（さら）す事になるのかも知れない。しかしさう云ふ最後の日までは、やはり先の切れた尾を振りながら、あの洒落者（しやれもの）のブラムメルのやうに、悠々と泳いでゐようと思ふ。

兎

今昔物語(こんじやくものがたり) 巻五(まきのご)、三獣行菩薩道兎焼身語(さんじうぼさつのみちをおこなひうさぎみをやくものがたり) と云ふ Jātaka の中に、こんなお前の肖像画がある。——「兎は励みの心を発(おこ)して、……耳は高く𤸎(くぐ)せにして、目は大きく前の足短く、尻の穴は大きく開いて、東西南北求め歩けども、更に求め得たるものなし……」

雀

これは南画(なんぐわ)だ。蕭々(せうせう)と靡(なび)いた竹の上に、消えさうなお前が揚(あが)つてゐる。黒ずんだ印(いん)の字を読んだら、

大明方外之人(たいみんはうぐわいのひと)としてあつた。

麝香獣(じやかうじう)

梅紅羅(ばいこうら)の軟簾(なんれん)の中に、今夜(こんや)も独り眠つてゐる、淫婦潘金蓮(はんきんれん)の妖(あや)しい夢。

獺(かはをそ)

毎晩廊下へ出して置く、台(だい)の物(もの)の残りがなくなるんですよ。 獺(かはをそ)が引いて行(い)くんですつて。 昨夜(ゆうべ)も舟で帰

る御客が、提灯(ちやうちん)の火を消されました。

黒豹(くろへう)

お前は歯の美しい Black Mary だ。南京玉(なんきんだま)の首飾りや毛糸の肩掛を持つて行つてやつたら、さぞ喉(のど)をならして喜ぶだらう。

蒼鷺(あをさぎ)

何(なん)でも雨上(あまあが)りの葉柳の匂(にほひ)が、川面(かはも)を蒸してゐる時

だつた。お前はその柳の梢（こずゑ）に、たつた一羽止まつてゐたが、「夕焼け、小焼け、あした天気になあれ。」――そんな唄を謡（うた）つて通（とほ）つた、子供の時のおれを覚えてゐるかい？

栗鼠（りす）

亜欧堂田善（あおうだうでんぜん）の銅版画（どうばんぐわ）の森が、時代のついた薄明りの中に、太い枝と枝とを交（か）はしてゐる。その枝の上に蹲（うづくま）つた、可笑（をか）しい程悲しいお前の眼つき……

鴉

「今晩は。」「今晩は。　この竹藪は風が吹くと、騒々しいのに閉口します。」「ええ、その上月のある晩は、余計何だか落着きませんよ。——時に隠亡堀は如何でした？」「隠亡堀ですか？　あすこには今日も不相変、戸板に打ちつけた死骸がありました。」「ああ、あの女の死骸ですか。おや、あなたの嘴には、髪の毛が何本も下つてゐますよ。」

ジラフ

これは玩具（おもちゃ）だ。黄色い絵の具と黒い絵の具とが、まだ乾かずにべたべたしてゐる。尤（もつと）も人間の子供の玩具（おもちゃ）には、ちつと大きすぎるかも知れない。さしづめあの小ましやくれた、幼児（ランファン）基督の玩具には持つて来いだ。

金糸雀（かなりや）

理髪店の店さきには、朝日の光がさわやかに、万年青（おもと）の鉢を洗つてゐる。鋏（はさみ）の音、水の音、新聞紙を

拡げる音、――その音の中に交(ま)じるのは、籠一ぱいに飛びまはる、お前たちの囀(さへづ)り声、――誰だい、今親方(おやかた)に挨拶した新造(しんぞ)は？

羊

或日おれは檻(をり)の羊に、いろいろな本を食はせてやつた。聖書、Une Vie, 唐詩選(たうしせん)、――何(なん)でも羊は食つてしまふ。が、その中にたつた一つ、いくら鼻の先へ出してやつても、食はない本があると思つたら、それはおれの小説集だつた。覚えてゐろよ。綿細工(わたざいく)め。

（大正九年九月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。